

石ころ

ああ、僕は何とお人よしだったのだ
背中にろくでもない石ころをどっさり背負って
しかもいつかは役に立つかもしれないという馬鹿げた希望に
その石ころを何年も棄てきれないでいたのだ
つまりその石ころの重さを価値の重みと思ったのだ
そしてうんうん言いながら御苦労にも歩いてきたのだ
ああ、何と阿呆らしい今までだったろう

僕は‘選択’が愚かだという言葉信じた
ところがそれは石ころ百万個より重く
そして苦しく、しかも美しいことだったのだ
僕は、何とろくでもないガラクタを収集してきたのだらう
僕を蒼白い病にまで陥れたのだ、それらは
もう‘寛容’なんかとはおさらばだ
ああ畜生、何と僕は愚かだったのだ

もうこんな石ころは全て地面に投げ捨てよう
思いもよらなかつた、棄てることが力と呼ぶとは
解放だ、しかも苦渋に満ちた選択だ
こんな石ころは千年たっても食べよう筈もない
どんどんやれ、どんどん捨て去ってしまえ
何が残るかわからないが
しかしそれが僕の携えてゆくただ一つだ

(1982.6.9)